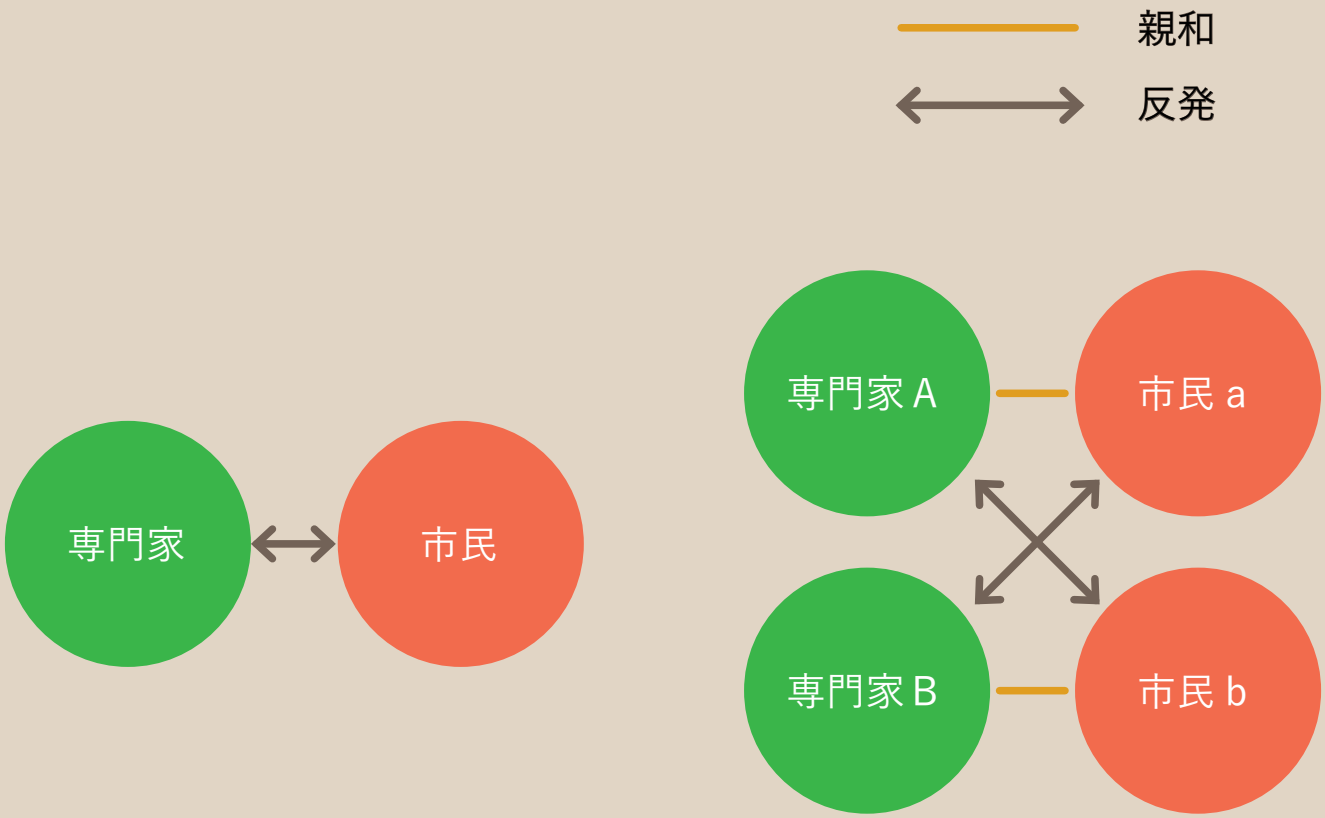
知識と考え方

知識・情報共有について

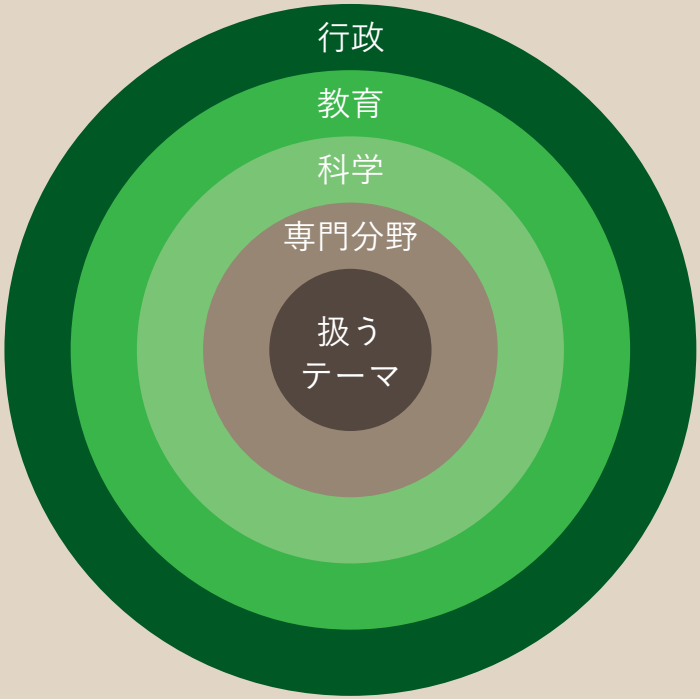
専門家と市民



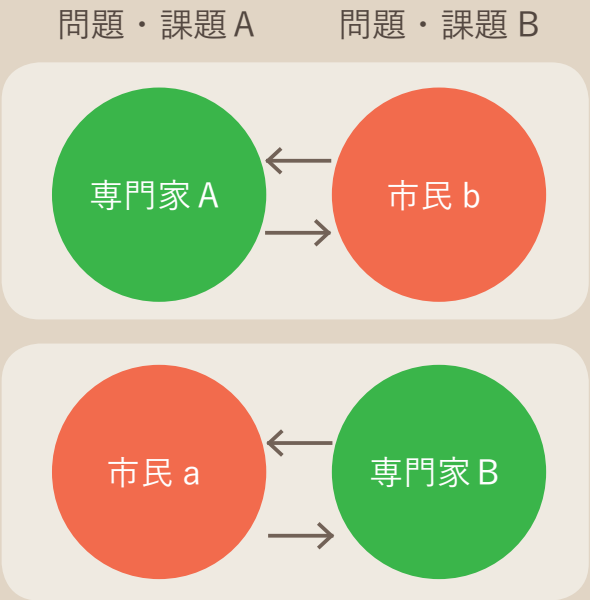
専門家と市民は、ある専門分野に属する知識の質と量に差異があり、対象に対する視座、視点、視野が異なります。それが対象に対する態度、意見や感情の違いを生むこともあるでしょう。しかし、「専門家」や「市民」という均質な集団が存在し、それらが常に対立構造を持つわけではない点に注意が必要です。
一見すると、専門家と市民の対立に見えても、専門家間の意見の違いが別の形で現れているに過ぎないこともあります。たとえば、専門家Aとその意見を支持する市民a、専門家Aと意見を異にする専門家Bとその意見を支持する市民bという構造がある場合、専門家Aと市民bが対立していたとしても、問題を専門家と市民の対立という構図で捉えることは適切でなく、専門家間の意見の違いの現れとして認識しなければなりません。

専門家の限界と相対性

専門家の限界

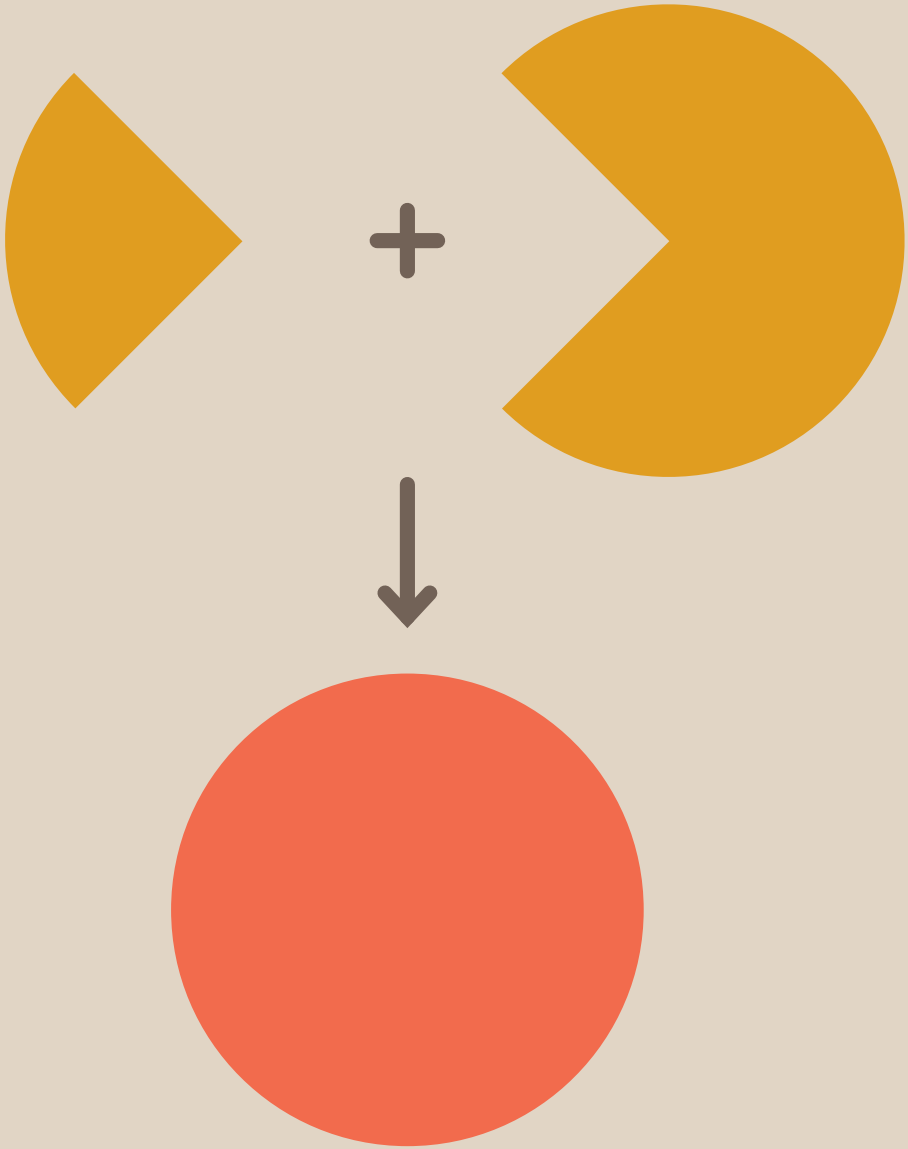


専門家の相対性



専門家はどこまで専門家なのか。誰が専門家で、誰が専門家でないのか。
問題・課題の時間的、空間的、社会的スケールが拡大し、複雑化する一方で、専門分野は細分化し、多様化しています。その結果、一人の専門家が扱うテーマは専門分野のごく一部であることが多くなります。たとえば、生命科学分野全体を扱う「生命科学の専門家」はおらず、限られた現象をテーマとして扱います。まして、科学全体を扱う「科学者」はどこにも存在しません。しかし、多くの場面で科学や、さらに広い範囲をもつ教育、行政について「専門家」として意見を求められることがあります。具体的な問題・課題を考える中で、専門家の限界を見極めることが大切です。
また、問題・課題Ａについて専門家Ａと市民ａという関係が成立したとしても、問題・課題Ｂについては立場が逆転し、市民ｂと専門家Ｂという関係が生じえます。
専門家はどこまでも、いつまでも専門家であるわけではなく、自ずと限界があり、その立場は相対的なのです。

知識・情報共有と欠如モデル



知識を共有することによって問題の解決を図るコミュニケーションの類型は、批判的な観点から欠如モデルと呼ばれることがあります。問題の原因は知識の欠如ではないのに、一方的な知識の伝達によって問題を解決しようとすれば、相手の信頼を失って事態を悪化させる恐れがあるため、注意が必要です。

ただし、ここで問われているのは問題の性質と解決手段の齟齬であり、知識の共有そのものが悪いわけではなく、状況に応じて知識の共有が問題解決に有効であるのは言うまでもありません。

知識の共有が有効な場面かどうか、問題・課題、コミュニケーションの状況を俯瞰的に捉えて判断しましょう。

リスク比較

第1ランク （最も許容される）	・異なる2つの時期に起きた同じリスクの比較 ・標準との比較 ・同じリスクの異なる推定値の比較
第2ランク （第1ランクに次いで望ましい）	・あることをする場合としない場合のリスクの比較 ・同じ問題に対する代替解決手段の比較 ・他の場所で経験された同じリスクとの比較
第3ランク （第2ランクに次いで望ましい）	・平均的なリスクと、特定の時間または場所における最大のリスクとの比較 ・ある有害作用の一つの経路に起因するリスクと、同じ効果を有する全てのソースに起因するリスクとの比較
第4ランク （かろうじて許容できる）	・費用との比較、費用対リスクの比の比較 ・リスクと利益の比較 ・職務上起こるリスクと、環境からのリスクの比較 ・同じソースに由来する別のリスクとの比較 ・病気、疾患、傷害などの他の特定の原因との比較
第5ランク （通常許容できない ・格別な注意が必要）	・関係のないリスクの比較（たとえば、喫煙、車の運転、落雷）

Covello V.（1989.）Issues and problems in using risk comparisons for communicating right-to-know information on chemical risks. *Environmental Science and Technology,* 23 (12):1444-1449.

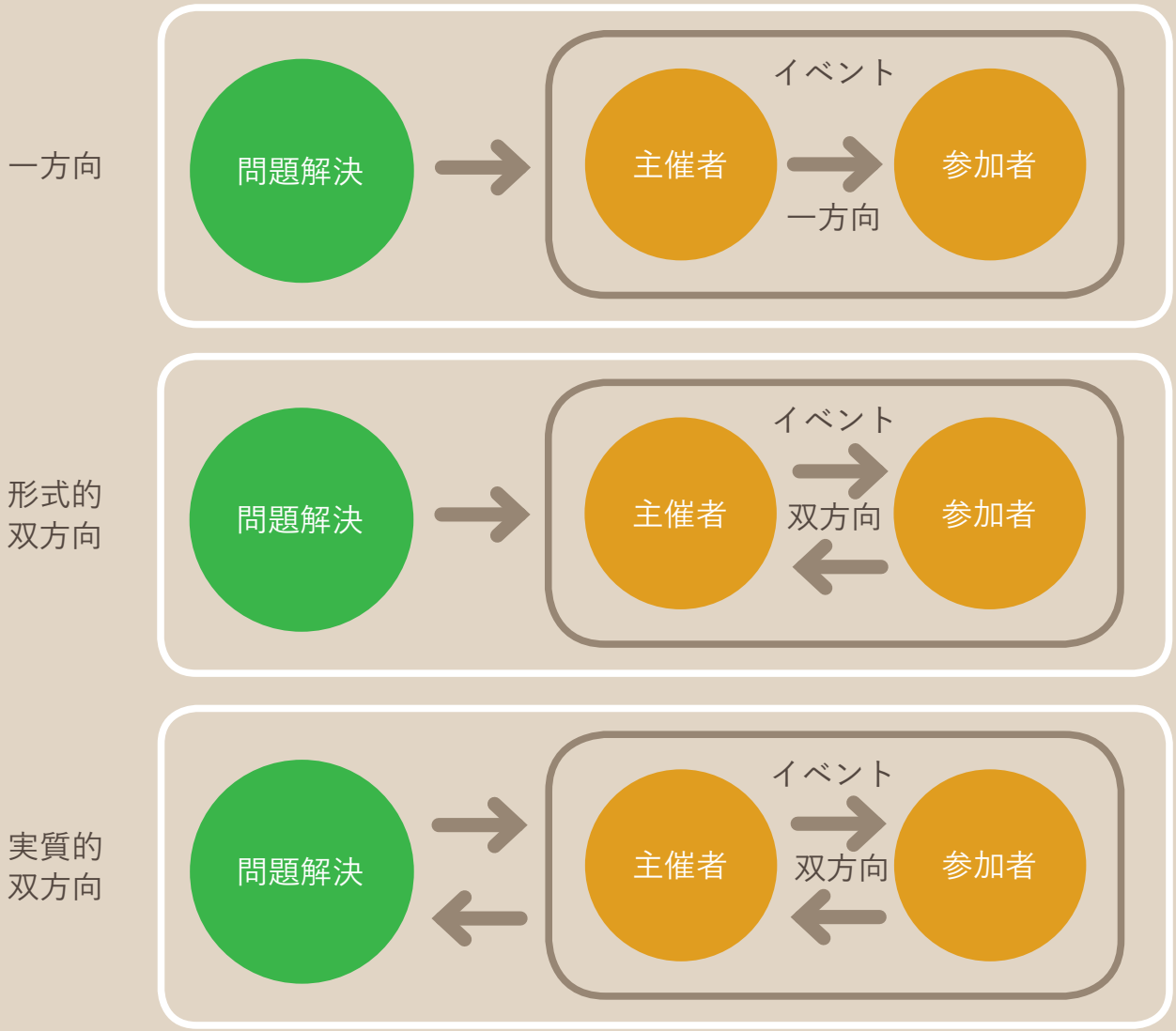
比較や類推は、有限の時間を生きる人間が経験を超えて世界を理解するために有効な方法です。しかし、何かをわかりやすく説明しようとするあまり、比較すべきでないものを比較してしまい、かえって事態を混乱させてしまうことがあります。それが、リスク比較の問題です。
ある立場から見たリスクは小さいことを人々に伝え、安心してほしいという思いからリスク比較が行われることもあるでしょう。しかし、不適切なリスク比較はしばしば受け入れられないようです。
どのようなリスク比較が許容されるか、許容されにくいかをまとめたものが左ページの図です。

リスクを比較すること自体が悪いわけではなく、有効な場面も多々ありますが、時と場合、相手に応じて適切な表現を考える必要があります。

知識と考え方

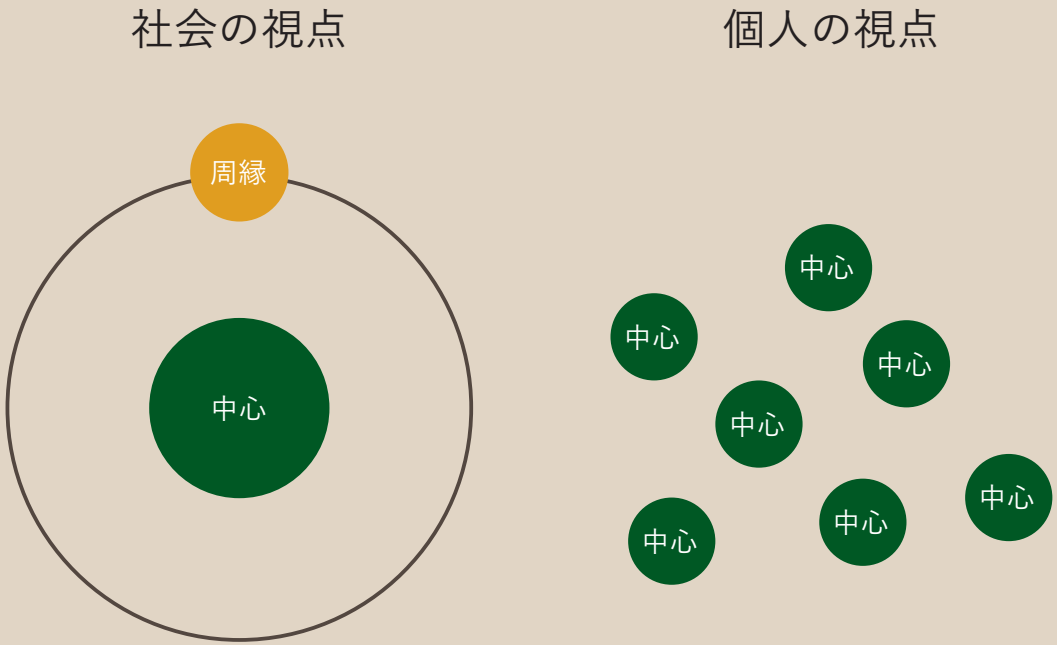
対話・共創について

双方向性


一方向
問題解決
イベント
主催者
参加者
一方向
形式的
双方向
問題解決
イベント
主催者
双方向
参加者
実質的
双方向
問題解決
イベント
主催者
双方向
参加者

コミュニケーションでは双方向性が重要であると言われますが、ある対話の場で発言の機会が均等であるからといって、必ずしもコミュニケーションが双方向であるとは限りません。一回の集まりの中でお互いの発言機会が担保されていても、話している事柄の決定権を一方が持ち、その集まりで話し合われたことが何ら事柄の決定に影響しえない構造を持っているとしたら、全体を通じて双方向であるとは言えません。双方向性をうたいながら、対話の実績づくり、ガス抜きのために行われる一方的なコミュニケーションは、長い目で見れば多くの問題を生じるでしょう。形式的に双方向であるだけでなく、コミュニケーションを通じて相互に変わりうる可能性に開かれていること（相互作用的であること、相互作用性）が重要であり、求められるのは実質的な双方向性なのです。

社会の視点と個人の視点



あるリスクについて、特定の対応がその発生確率を低減させるものの、一定の確率で副作用を生じてしまうような場合、発生確率が低減する程度と、副作用の大きさや発生確率、実施コストなどを比較考量して、社会全体で十分な利益があると考えられるときには、社会として、その対応を選択することが妥当であるように思われます。

しかし、その副作用が致命的なダメージを与える場合には、たとえ副作用の発生確率が小さかったとしても、一度きりの生を生きる個人として、その対応を受け入れがたいという事態が生じ得ます。

同一の事実に基づいたとしても、社会の視点と個人の視点では判断が異なり、一概にどちらが正しいとは言えない場合もあることに留意が必要です。

コミュニケーションと信頼の関係

コミュニケーションにおいて、ステークホルダー（関与者）間の信頼が重要であると言われます。
世の中の全ての問題を一人ひとりが理解し、判断することは困難であり、社会の限られたリソースを有効に活用するためには、信頼の構築は不可欠です。専門家から提供される技術的内容に加えて、その専門家を信頼できることが、人々の安心につながると言われています。
ただし、信頼の重要性が強調されるあまり、健全な懐疑を抱くこと、それを表現することが難しい環境では、社会の中で適切な議題構築がなされず、対応すべき問題も見過ごされてしまう恐れがある点に注意が必要です。
信頼を静的に固定しようとすると、必要な懐疑が許されず、排除されてしまいます。信頼と健全な懐疑が混在するコミュニケーションを通じて、信頼が動的に達成されている状態を目指しましょう。